

救うのは遺跡か人間か？

坪井善明

救うべきは人間ではないか？

カンボジアの現地を視察した日本人のなかには、『今遺跡を保存修復する意味がわからない。貧しさや戦争の傷跡に苦しんでいる人びとを救済することの方が先決問題ではないか』という趣旨の発言をされる方がいらっしやいます。「救うべきは人間であり、遺跡ではないのではないか」という疑問です。

この問題に関して、我々アンコール遺跡国際調査団の内部でも、日本人同士だけでなくフランス人やアメリカ人も含めて真剣に討議してきましたし、また、カンボジア人の関係者とも数多く意見交換してきました。その結果、一応の我々の基本方針として次のように考えています。結論を先取りして言えば、「救うのは、遺跡も人間も」ということです。わかり易く御説明します。

遺跡修復はカンボジアの手で

我々は、「カンボジアの遺跡はカンボジアの手で」を基本原則に行動しています。我々がやっていることは“援助”や“支援”であり、我々が主体になって修復事業を担っているわけではありません。カンボジアの心ある人びとが、遺跡の保存や修復が必要だと認識しているが、現在のカンボジアの状況では、とても保存修復に手が回らないので国際社会に助けてほしい、という要請があって活動しているわけです。

そして、我々が活動を始めた時に、今までフランスが中心となってやってきた保存修復事業の長所・短所を詳細に検討しました。フランスが保存修復を行っていた時は、主に植民地時代であったこともあり、多くの問題がありました。その中でとくに、(-)文化財を持ち帰らないこと、(-)カンボジア人を主体に置くこと、(-)遺跡と住民との関係を再考すること、を我々の新たな原則にしようと意見が一致しました。

遺跡と住民との関係でいえば、アンコール遺跡には特別の歴史があります。アンコール遺跡は1860年にフランス人のアンリ・ムオー（1826～61）によって“発見”され、その美が主としてフランス人の手によって世界に喧伝されました。“美の崇拜”という一種の“物質崇拜主義”な観点から、遺跡の荘厳さ・彫刻の華麗さが過度に強調され、そこに住んでいる人々の状態が“現住民”として無視される傾向は確かに存在していたのです。

従って、我々は、その反省の上に立ち、遺跡と住民との新しい関係を構築するように保存修復にたずさわることを決意し、“社会経済班”というグループを組織し、遺跡と住民との関係を中心に実地調査を繰り返しています。

アイデンティティの問題

それでもまだ、遺跡を救う事業をやるのが、何故人間を救うことになるか、よくわからない、という疑問をもたれる方がいらっしゃると思います。我々は次のように考えます。

現在のカンボジアの状態を見た時、確かに貧しさに苦しむ人々を救うことが緊急の必要事だと思えます。我々もそのような救済事業の大切さを認識していますし、他の NGO などの救済活動に心からの支援をしています。たとえば JVC と意見交換などもしています。ただ、それぞれのグループには特色があります。

我々はカンボジア人の利益をより中長期で考えています。つまり、今遺跡の保存修復を国際社会がカンボジアの人に代わってする意義を次のように考えています。将来生活が安定したら、カンボジアの人びとが自分の文化的・民族的アイデンティティを見直す時期が必ず来ると思えます。その時に、過去の歴史を伝える遺跡がすべて崩壊したり破壊されていたら、自分たちの過去を知ることができなくなります。崩壊・破壊を防ぎ、正確な過去を未来に伝えること、そして栄光ある歴史を知って誇りをもつこと、その為の基礎となる仕事をするところこそ、我々の仕事の意義だと思っています。とくに、高温多湿で紙の文化がないカンボジアでは、石造建造物の遺跡、とくにその頂点にあるアンコール遺跡は歴史を伝える大事な情報が一杯つまっている遺産です。その時まで大事に遺跡を保存修復することは、カンボジアの人びとの心の問題、アイデンティティの問題としてきつと役に立つと確信しています。これが核心です。

遺跡と人間との共存

また、実際的な問題として、遺跡を中心に観光開発が始まることになります。その時、遺跡周辺に住む人びとの雇用問題が解決されて所得が上がったり、観光関連の道路・電気・水などのインフラ整備が進み、生活レベルが向上する可能性があります。それと同時に、開発に伴う環境破壊や貧富の差の拡大、商業化による俗悪化などマイナス面も生じる恐れがあります。我々は、そのようなマイナス面がなるだけ生じないように、カンボジアの人たちと協力して、予防的措置をとるように提言したりしています。言いかえれば、遺跡と人間との共存をはかり、地域の“社会文化発展”をおし進めることが我々の援助の究極的な目標です。この意味で、我々の活動を長い眼で見てくだされば、“遺跡も人間も”救うことになると、確信しています。